修 士 論 文 要 旨

学籍番号 20GH201 第 号	氏 名 楠美佳奈
人文社会科学 専攻（コース： 現代共生 ）	

論文題目 「摂関・院政期の中央貴族社会と陸奥国」

本論文は、十世紀から十二世紀の中央貴族社会と陸奥国の関係について、京都を中心とした中央貴族社会と、陸奥国や鎮守府将軍の立場を担う軍事貴族という、それぞれ二つの観点から、地方支配の実態について検討したものである。

従来、平安期の東北史研究は、在地社会を中心に語られることが多く、政権の中枢にあって国政を主導している貴族たちが、どのように地方を捉えていたのかという点を交えながら語られる機会は少なかった。そこで、本論文では、中央貴族たちが陸奥国に求めた役割を分析しつつ、朝廷から統治権限を委譲された陸奥守や鎮守府将軍といった官職の人々が、在地においてどういった活動を行っていたのかについて考察を加えることで、上記の問題を明らかにすることを目的とした。

本論文では、序論にて問題提起を行ったあと、全四章の構成をとり、最後に各章での検討をふまえて論文全体の結論を述べた。各章で検討した内容は、以下の通りである。

序論では、十世紀から十二世紀において、陸奥国の在地社会は、中央貴族社会とどのような関係を築いていたのか、また、陸奥守や鎮守府将軍の補任の持つ意味について問題提起した。

第一章では、鎮守府の成り立ちや十世紀段階の鎮守府将軍の任官について分析し、鎮守府-秋田城体制論の再検討を行った。これは陸奥国において鎮守府が国府の支配下にあったか否かという点について、鎮守府の成り立ちや官人の性質を明らかにしながら、鎮守府は国府の下に位置付けられる機関であると結論付けた。

第二章では、十世紀末期の中央官人である藤原実方の陸奥守補任について考察し、その陸奥国への下向が、在地の軍事貴族を統率し、国内の治安を安定させ、円滑な徴税を行うためであったと明らかにした。

第三章では、実方亡き後の小一条家と陸奥国の関係について分析した。実方の子である朝元の陸奥守としての下向が、実方の陸奥守の時代の再現を志向したものであったこと、河内源氏の陸奥国の進出は、小一条家と小一条院を媒介としたものであったと位置付けた。

第四章では、陸奥交易御馬と陸奥守・鎮守府将軍任官者の関係の分析を行った。ここでは、御堂流の家司層が陸奥守となることで、地方から都へ多くの富が流入し、朝廷財政を支えることになった過程を考察した。また、それらが奥州藤原氏にどのような形で引き継がれたのか確認した。

結論部分では、まず第一章から第四章にかけての検討で明らかになったことをまとめた。陸奥国における鎮守府は「第二国府」としての機能を備えていなかったこと、藤原実方・朝元といった小一条家の陸奥守補任は在地の軍事貴族層の抑えと円滑な国衙運営を目指し行われたこと、陸奥国を拠点として活動する軍事貴族層は京都の中央貴族層との関係を介して国内に勢力を広げていったこと、奥州藤原氏は摂関家家司の系譜を引き継いだ貢納を行ったことを明らかにした。そして上記の点をふまえ、平安期における京都と陸奥国の政治的結びつきは、常に朝廷における高位の貴族層を介した人事によって支配されていたことを指摘し、彼らを主家とする家司層が実際に陸奥国へ赴任し、安定的な任国の運営を行うことが、都へ安定的に富を運び、結果的に朝廷財政を支えることにつながっていたと結論付けた。